

## NewSession

### 2030年冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致の意義

古坂さん

今を動かす知と出会う New Session。こういうのはないんですけれども急にやってしまいました、すみません。あなたの心の MC 古坂大魔王でございます。夏季の東京オリンピック・パラリンピックそして冬季の北京オリンピックと続きまして。ちょっと1年ずれ込んだり様々なことがいろいろあって、いろいろな意見がある中でも間違いなかったのは、いっぱい熱戦があり感動があり興奮があった。こちらは数々の感動と興奮・希望を頂きました。そして3月4日にははいよいよ北京パラリンピック開幕します。今世界的な情勢がいろいろあって、いろいろな思いがある中でも、パラリンピックは皆さん一生懸命自分たちを高めて、そして技を、力を拮抗しあうというパラリンピックが3月4日に開幕します。2030年の冬季オリンピック・パラリンピックになんと今、札幌市が手を挙げているというわけでございまして。そこでこの2030年冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致の意義、こちらについて様々な視点から議論をしていきたいと思えます。皆さんどうぞよろしくお願ひします。見事札幌市に決定すれば1998年の長野オリンピック・パラリンピック以来なので、32年ぶり3回目という自国日本の開催。そして札幌市としては1972年以来58年ぶり。あのジャンプの笠谷（幸生）さんとかいましたよね。僕らは正直知らないんですが、生まれる前なので。マンガとかで読んだことがあるんですよ。口開けてとぶんですよ、こうやって。何かそういうのがあった。58年ぶりの2回目の開催というわけでございまして、日本でこのオリンピック・パラリンピック開かれたら絶対盛り上がると思えます。そこで今日はさまざまな分野のゲストにお越しいただきまして、それぞれの目線・角度からですね、そして自分の思いの丈も含めてすべて意見を言っていただいて、議論を交わしていこうかなというふうに思っております。では紹介したいと思います。まずは5大会連続で冬季オリンピックに出場しました、元スピードスケート選手の岡崎朋美さんでございます。よろしくお願ひします。

岡崎さん

よろしくお願ひします。

古坂さん

スポーツ選手の観点からよろしくお願ひします。

岡崎さん

頑張ります。

古坂さん

続いて青山学院大学地球社会共生学部教授、松永エリック匡史さんでございます。よろしくお願ひします。

松永さん

よろしくお願ひします。

古坂さん

教育者の目線からという、今スポーツ選手、教育者。そして続いて楽天証券の経済研究所ファンドアナリスト篠田尚子さんよろしくお願ひします。

篠田さん

よろしくお願ひします。

古坂さん

こちらは経済の部分ですね、この目線。そしてスマホで通訳者・翻訳者を探せますアプリ、株式会社 Oyraa（オイラ）代表取締役社長コチュオヤさん。

コチュさん

よろしくお願ひします。

古坂さん

そしてリモートで出演の Z 世代須知高匡さん。

須知さん

よろしくお願ひします。

古坂さん

須知さんは交通インフラを開発するベンチャーを経営しております。そして最後はリモートで出演、札幌市長の秋元克広さんです、よろしくお願ひします。

秋元市長

よろしくお願ひします。

古坂さん

もうまさにど真ん中の方でございます。札幌市長としてのお話をうかがいます。さあ秋元市長、今回の招致にあたって札幌らしい持続可能なオリンピック・パラリンピックの開催というのを掲げていらっしゃるけれども、具体的にはどのようなものなのでしょうか。教えてください。

秋元市長

ちょうど開催年次が 2030 年ということで SDGs の目標年次にあたりますよね。そういう意味では SDGs の未来を見据えた象徴的な大会にしたいなとこんなふうに思っています。具体的には 3 つの視点あります。1 つは持続可能な街・地域ということ。そしてもう 1 つは持続可能な地球の環境。そして 3 つ目が持続可能なオリンピック・パラリンピックということで大会自体が持続可能でやり続ける、そういったことができるような、そういう大会にしていきたいなというふうに思っています。そういう意味では持続可能ということをテーマにした大会と、そこに行くまでのいろいろな、様々な環境問題であったり共生社会についてのそういうプロセスということで、将来につながる大会にしたい。そんなふうに思っています。

古坂さん

そうですね、ありがとうございます。さあ岡崎さん。札幌市の大会ビジョンこういう今の持続可能な部分とか環境とか、オリンピック自体のというものもありましたけれども、スポーツ選手からすると、どういふふうな印象を受けていらっしゃるでしょうか。

岡崎さん

やはり札幌オリンピック 1972 年に開催してますので、いろいろな施設は確かに今存在しているというか、あるんですね。

古坂さん

49 年前ですからね。

岡崎さん

なのでまたちょっといろいろ進化、時代が進化してきているのでいろいろな部分を少し調整しなきゃいけない部分もあると思うんですけども、もう一度札幌で栄光を見たいというか、札幌でそういうことをやってみんなで盛り上がりたいなというふうに思うので。

古坂さん

特に選手は札幌に現存する施設も使ったことあるわけですよね。

岡崎さん

はい、あります。

古坂さん

そうすると日本選手としては嬉しいですよね。

岡崎さん

そうなんです。「あ、ここでやったんだな」っていうそういう実感もあるんですよね。なのでもう一回ちょっとね、みなさん北海道の人は少しオリンピック離れというわけでもないんですけども、その感動をこう引き継いでね、子供たちとかにいつてもらいたいので。せっかくなのでそういう施設もしっかり使ってSDGsもありますからエコということで。

古坂さん

なるほど。どうですか。オヤさん。

コチュさん

これ結構面白くて、世界のトレンドとかを見るとやっぱり経済的な負担と地球への負担っていうところで

古坂さん

地球への負担

コチュさん

そうなんです。この2つの理由で結構手を引いてる国も多い。2004年から比べるとオリンピック招致に名乗りを上げる国も半分くらいに減ってきているっていうこともありますし、入った後も離脱してしまう町とかもあるんですね。この前のボストン。アメリカのボストンとかも2024年のオリンピックからも離脱したっていうところで、市民から批判を受けてっていうところもあり、結構危ない所になってきているなっていう印象を持っていますけれども。ここでもし札幌でウインターオリンピックが開催されたら本当に良い形で世界に良い例を見せることができたらいいなと思っています。そういった意味では。

古坂さん

ありがとうございます。このままもう全然いけるんですけどね。でもいろいろみんなでこうやっていけるということで、今回のディスカッションの大テーマ発表しますね。2030年冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致の意義を2つのポイントで議論していきたいと思います。テーマまず1つ目はスポーツ大会の自国開催がもたらす効果と次世代への継承ですね。効果といたらここはちょっとね、どうしてもニュース的と言いますか、やはりお金の問題ですよ。経済の部分札幌市で自国開催をするとぶっちゃけてどれくらい経済効果があるのか、また冬季と夏季と違うと思うのですが。篠田さん、今札幌で行った場合にはどれくらいあるとお考えですか。

## <スポーツ大会の自国開催がもたらす効果と次世代への継承>

篠田さん

そうですね。ちょっと具体的な金額は多分秋元市長からお話いただくとして、金額的にはもうとてつもなく大きな金額が。

古坂さん

やっぱり大きいんですか？

篠田さん

そうです、大きいですね。一般的にですけれども、こうしたスポーツイベントの経済効果って大きく2つありまして、ひとつは直接効果と呼ばれる、先ほど設備のお話なんかも少し出ましたけれども、こうしたものを改修したりですとか新しく作るようなことがあった場合に、それに伴っていわゆる建設業界とか、そうしたところに需要が発生する。これが直接効果と呼ばれるもの。あともう一つは東京大会の時にはレガシー効果なんて言われて、波及効果というふうに言われることもありますけど、直接効果から派生してまた生まれる経済効果というのもありまして、これは必ずしもオリンピックの前後だけで発生するわけではなくて、大会開催後例えば数年とか十数年に渡って継承されていくようなある意味効果というものもあるので、それをすべてトータルすると特に波及効果の方ですよ、これはとても金額が大きくなるので、どういうふうに定義づけるのかっていうのは難しいんですけれども、やはりどんな形であれ経済効果は見込めると。

古坂さん

なるほどね。その部分もある。市長今お話いただきました。実際の経済効果はどういうふうに見込んでいらっしゃるんですか？

秋元市長

今回は札幌だけの開催ではなくてですね。北海道で、ニセコあるいは帯広といった既存施設を使うことが今回の計画の大きな点です。そういう意味では13、今競技施設を予定しているんですけど、そのうち12については既存施設の改修で、建て替えるというものについては1つの施設なんですね。将来的な負担をできるだけ小さくしようということにしています。一方で先ほどお話がありましたように直接効果という意味では新たに建設するものがありませんので、全体の試算としては北海道全体で4500億円。そして日本全体で7500億円というふうに推計をしております。これは直接効果です。そのほかに当然前後に多くの方がいらっしゃる、あるいは北海道のことを札幌のことを知っていただいて、その後の観光につながるといういわゆるレガシー効果というのもあろうかというふうに思いますが、直接の効果としては日本全体で7500億円ということで推計をしております。

古坂さん

今もうさらっといきましたが普通に考えたらこれはやっぱりすごいですよね。本当に大きなイベントなんですね。なるほど、ありがとうございます。さあ松永さん教育者の観点・立場から見るとこの経済効果はどういうところに注目していますか？

松永さん

僕はデジタルトランスフォーメーションとかそれが専門の人間なので、変わっていかないといけない。そういう意味では僕らの視点からするとやはり今の経済効果っていうスキームが変わっていかなき

やいけないと思ってるんですね。例えばよくあるんですけどお客さんとか、例えばユーザーさんとかいろんなものの体験が変わってくると思っていて、例えばみんながそこに行って応援するテレビで応援するってかたちじゃなくなるんじゃないかと思ってるんです。そういう意味では建設っていうのも実はモノを建てるんじゃなくてメタバースの世界を構築するのが建築になるかもしれないし、メタバースの世界になってくるとリアルに来る人じゃなくて世界中の人がお客さんになってきますので、お金の出し方も変わってくる。そうなるってとビジネスモデルが絶対変わってくるんですね。そういう意味では我々はその8年後の人間を育てている立場なので、とにかく変革していくっていうふうにしとかなないと今のままで8年待つのかって、それはちょっと違うと思ってるので、それを心がけて今いろんなことをやっています。

古坂さん

須知さん今こういう経済効果も含めて8年後だというふうにもなっていますけれども、聞いてどう思われますか。

須知さん

そうですね。例えば東京オリンピックの時ってすごいコンパクトにしようっていうふうに招致のときにしたと思うんですけど、例えばパリ五輪ってタヒチとかでやったりとか、もう全然コンパクトとかなくてSDGsとかっていうふうになったと思うんですね。なので札幌オリンピックも今はSDGsとかって言うところだと思うんですけど2025年とかにはその次とか、その次の次っていうところが出てくると思うので、そういったものを受け入れられるっていうような、計画ありきじゃなくて変わったものを受け入れるとかそういうアジャイル性というところが今回はあればいいなというふうにすごく思っていますね。

古坂さん

だからどこかで若い人のイメージ的には何かを決めてその通りやる、硬いふうにやると失敗するよ、みたいな雰囲気を感じているんですね。

須知さん

そうですね。実際東京オリンピックでも「暑いからじゃあ札幌でマラソンやりましょう」とかっていうのができたと思うんですよね。そういうところは計画ありきじゃなくて若い人の声を聞いて計画の変更とかも前向きにしてもらえればと思っています。

古坂さん

ありがとうございます。先ほど話にも出ましたが札幌で開催する場合、新設の競技会場がほぼゼロだということをお聞きしました。篠田さん、これは結構経費を抑えられていると思うのでそうなるってと経済効果も何か小さく、直接効果と言われるものが結構小さくなるような気がするんですがどうでしょうか。

篠田さん

何かイメージは多分皆さんそういうふうに思われると思うんですけど、これって結構すごいことで経費って抑えられるに越した事はないんですよ。経費ですから。あとその直接効果で先ほど秋元市長のお話でもやはり建設部門のというお話がありましたけれども、必ずしもゼロから何かを作ることだけが経済効果に反映するわけではないんですよ。ですから既存施設の改修っていうのも立派な経済効果を生みますし、あるいはバリアフリー化とかですね。これは将来的に非常に貴重な観光資源にもなりますし、時代に合わせる形でやはりどんどんアップデートしていくと。建物であったりとか設備とかですね。これ



はですからどちらかというレガシー効果の方に結構反映されてくるので重要なことなんですよね。実際に東京大会も必ずしも大規模な設備がたくさんできたわけではないと思うんですよね。皆さんもご記憶にあると思うんですけど。一方でその前後で例えば横浜アリーナが改修されたりとか代々木体育館が改修されたりとか綺麗になることで結果的によりまた使いやすくなったりですとか、今はコロナがありますけれども、またそのお客さんを戻してそういったイベントもできるようになれば、それは当然経済効果になっていくので。長い目を見たときにですね。ですから必ずしも新しい設備がゼロというのが悪いことではなく、むしろ楽しみですよ。どういうふうになるのか。

古坂さん

フランスもね、あそこを使ってやりますよとか、世界遺産を使ってやりますよと言われるとこっちはワクワクしますよね。

篠田さん

ワクワクしますよね。

古坂さん

あそこでやるんだという。普段一般人が入れないところでやるとなると。なるほどそういう考え方もあると。ありがとうございます。さあ松永さんはいかがですか。

松永さん

ちょっと視点を変えてみたいと思うんですけど。やっぱりサステナブルという言葉が出てきましたよね。サステナブルのためには何をしなきゃいけないとかすごく大事だと思っているんですよ。例えば今言ったように建設がどうのってすごく大事だと思うんですけど、やっぱり長期的にどうサステナブルにするかという点で僕はいくつか視点があると思っているんですね。まず僕の専門であるデジタルトランスフォーメーション、これはもう絶対必要だと思ってるんですね。あともうひとつ最近出てきているのがコロナの時代になってきて我々が考えなきゃいけないのは、バイオトランスフォーメーション、要はバイオ。生物レベルでどうやっていくか。アフターコロナの世界でどうやって我々はああいうものと付き合っていくのかっていうのも、これは多分都市としては表明していかなきゃなと思いますね。あとサステナブルど真ん中なんですけど、やっぱりエナジートランスフォーメーション。カーボンニュートラルの捉え方が多分違って、今まではただ何%削減だったんだけど、今はすべての産業がもうインクルードされてるわけですよ。例えば今日本の自動車産業ってどうやってカーボンニュートラルにするかということで、もう会社の命が関わってくるぐらいのことになっていて。多分この元々の協定で議論されたときの十何%って意味合いが全然違ってくると思うんですね。だからただパーセンテージではなくて、この削減が何を意味するのかということを全体にやらなきゃいけない、これが3つ目のものなんですけど。あと僕最後にあると思っているのが、いわゆる社会のトランスフォーメーション、ソーシャルトランスフォーメーションってよく言うんですけど。多分8年後の世界ってダイバーシティの世界は変わっていると思っているんですよ。そういう意味では例えば国籍・性別も多分関係なくなっているし、あと僕願わくは、これ僕の個人的な願いなんですけど、パラリンピックという考え方がなくなって欲しいなと思っていて、全部が一体になっていく。これ僕はダイバーシティの前提だと思っているんですけど、例えばそれをもし実現できると、これって市場で考えるととてつもない市場になると思うんですよ。世界中の人が共感しますので。そういうふうな形でトランスフォーメーション、サステナブルということをつまんでいくとすごく大きな意味のあるものになってくるんじゃないかなと思います。エコノミ

ストが1回言ったのが、2022年のこの大会っていうのは、いわゆるポリティカルフットボールだと言っている。

古坂さん

何ですか？

松永さん

要は政治的にスポーツが使われる。いろいろな議論起きているじゃないですか。政治に使われてしまうんじゃないかということが起きている中で、もしかしたら国対抗という考え方がもう古いのかもしれない。新しい経済圏でやるってことをうまく、今何かアイデアがあるかっていうとないんですけど、でもそれを議論することは必要なんじゃないかな。だからさっき岡崎さんおっしゃったように実際にやるのはすごく難しいと思うんです。パラとあれを全部できるかというところじゃないんですけど、何か方法はありますか。

古坂さん

わかります、探りたいですね。

松永さん

探りたい。それをみんなで議論したい。それも札幌市がやるのであれば、札幌だけでやるんじゃなくて世界中の人たちを巻き込んで議論をして結論を出していく。要は日本、札幌のオリンピックではなくて、世界のオリンピックっていうふうにしていくと、多分感覚が変わってくると思うんですけど。

古坂さん

それは同意します。コチュさん、いろんな国が例えば今も国籍を変えてとか、特に卓球なんかはほとんど中国人が全世界に散りばめられていることもある。そこら辺の部分でどう思いますか。

コチュさん

何て言うんですかね。オリンピック対パラリンピックっていうところとか、誰かを区別するというところこそダイバーシティじゃないっていう、多様性じゃないっていうふうに思っているの、そこをできるだけシームレスに組み合わせるっていうところは非常に重要だなと思いますし、多様性っていうところでいうと結構私誇りに思っているっていうか、東京オリンピックで世界歴史の中で一番高い男女の比率がほぼ一緒50、多分女性が48パーセントくらいですかね。

古坂さん

選手ですか？

コチュさん

選手。

古坂さん

そうだったんですか。

コチュさん

ということが、世の中初めて達成されたっていうところで、非常にIOCもそうなんですけれども、東京も非常に頑張ったなとは思ってますし、もうちょっと何て言うんですかね、そういったバランスができていいなとは思いました。札幌でのオリンピックとかを考えると、もうちょっと東京オリンピックっていうのがある程度ダイバーシティアンドインクルージョンの取り組みが、わざとじゃないんですけど、そういった取り組みが企画されていて、多分後押しされていてやらされたと思うんですけど、もう

ちょっと札幌の2030年に向けて描きたい将来っていうのが何て言うんですかね、自分ごと化された日本のダイバース社会っていうことが、もうちょっとできたらいいなとは思っています。今結構口だけっていうか、取り組みだけっていうところがまだ何て言うんですかね、人工的なところもあると思いますし、まだ日本人の思考っていうところがまだそんなに変わってないので、海外から来られる方とかもその時まで、2030年までに日本も日本人の思考も少し変わって、自然とダイバース社会。国籍だけじゃないダイバース社会を実現できたらいいなと思います。

**古坂さん**

こういうのが体现できるし、表現できるし行動できるのがオリンピックである。世界中が注目しているんで。これまた話は少し戻るんですけども、こんな大きなイベント、しかも意義のあるものにしなきゃいけないイベント、やはりちょっと僕も気になっているのは経費のところなんです。秋元市長、通常とどれくらい経費としては抑えられているんですか？

**秋元市長**

先ほど経済効果の数字でお話をしましたが、経費自体は施設建設に関わるもの、これは建て替えが1つだけと言いましたけれども、そのほかに改修部分入れてですね、ここの部分は800億円を想定しています。そのうち札幌市の市内にある施設については700億円です。その中身としてはですね、1つ1972年の時に作った体育館があるんですけども、そこが老朽化をしているので建て替えをして新設をするということです。その経費と、それからジャンプ台が大倉山と宮の森ということでラージヒル・ノーマルヒル2つ別なところにあるんですけども。

**古坂さん**

そうですね。

**秋元市長**

そうするとランニング経費も二重にかかってしまうので、それを一本化しようと、1つの会場に持っていくように。それと選手村として使うものですね。そこは市営住宅の建て替えをその時期に合わせて、もともと予定している市営住宅を使っていく。そういった経費を800億円という形で想定しています。その他の運営経費については2000億円ほどなんですけれども、それらにはいわゆる運営経費ですので、部分的な仮設には使いますが、それはスポンサー収入であったり民間からの収入ということで、全体では3000億円ほどの経費を見込んでいる状況です。

**古坂さん**

それでもやっぱり既存のものを使っているから相当抑えられたということですね。

**秋元市長**

そうですね。例えば他の施設を全部建て替え、あるいはその新設をするとか、メディアセンターとかっていうものも新設をするということではなくて、既存の建物、展示場として使っている建物を使うとかですね。例えば開閉会式の会場は札幌ドームというのがあります。

**古坂さん**

うーんなるほど。

**秋元市長**

ここはサッカーの会場だったり野球の会場として使っておりますけども、ここを開閉会式に使うということで新たな、例えば東京の場合国立の競技場、新設というのか建て替えしましたけれども、そういっ



た経費は先ほど申しあげましたけども、13 施設のうち 12 施設は既存の改修で済ませているので、これはバリアフリーなものにすると部分的な改修というのはありますけども。

古坂さん

はい、なるほど、ありがとうございます。ここまでずっとお金の話を自分からしたくせに、と言ってもオリンピック・パラリンピックというのはお金のためじゃないよね、なんていうふうに急に話を変えるんですけども、どうしても News Picks やつてると金・金・金なやつだと思われまして。ちょっとね、僕も本当はオリンピック・パラリンピックは感動して、素晴らしいスポーツを見たいんですけどもね。でも経済も大事なんですよ。経済大事なんですけど、経済のためだけではなく、子供たち次世代へ何を残せるかというところ、ここも重要だと思います。岡崎さん、スポーツ選手としてどのようなものを子供たち次世代に残したいとお考えなんですか。

岡崎さん

いやもう本当にちっちゃい子がオリンピックを見て、その成長とともに次は自分たちになるっていうね。それで私たち親がすごい感動していくっていうそういうのはずっと続いていくとは思んですけど。やはり札幌で、札幌の街の子供たちにも直に選手と触れ合う。

古坂さん

生で見れますもんね。

岡崎さん

そうなんですよ。競技を見るっていうよりも、多少はちょっと選手村から出れる選手も何人かいて街を多分チョロつくと思うんですけど、そのときも、ジャンパーでいろいろフランスとかドイツとかっていうのを着ていると思うので。みなさんそれで見て「ああオリンピック選手だ」ってなってワクワクドキドキっていう感じで、やはりそういうのを子どもたちに直に見てもらって、やはりそうするともう子供自身が親に言われることなく競技を見に行きたいというふうになって、それをまた4年後ってずっと続いていくと思いますし。やはり日本のチームがしっかり日本の地でしっかりとメダルを獲得しつつ活躍したら、やはりもっと街もすごく盛り上がりますし、いろんな大人から子供まで皆さんが一致団結みたいな形になりますから、そこでやはり札幌市っていうか北海道全体が盛り上がるということに期待せざるを得ないと思います。

古坂さん

ちなみに須知さん、スポーツはすごく興味があるんですか？

須知さん

僕は仙台出身なので結構スキーとかをやってました。

古坂さん

じゃあ羽生君とかもいるしフィギュアスケートも結構ウィンタースポーツは興味があるんですね。

須知さん

そうですね、この前のオリンピックも見てました。

古坂さん

須知さんはその若者の世代として、どういうものを残して欲しいな。もちろん須知さんの後の世代も次は関わってきますから、どういうものを残していきたいなというふうに思っていますか。

須知さん

はい。2つあると思っていて、1つは2030年っていうところを目標にしていろんなものを動かして欲しいと思うんですね。これはオリンピックだけじゃなくて例えばロボットの開発とかそういうプロジェクトも東京オリンピックの2020年っていうところを目指してみんな頑張ってきて、やっぱり日本人ってすごい目標が必要な民族だと思っていて。

古坂さん

確かにね。

須知さん

それで例えば2025年の大阪万博とかあると思うので、じゃあ2030年っていうところの目標っていうのが我々にとってはすごいありがたい。その年数があることでそこに頑張っていこうっていうふうになるのかな、というふうに思っています。もう1つがスポーツの多様性みたいなところでいうと、特に冬の競技って僕のイメージ、すごいお金がかかるイメージがあるんですね。

古坂さん

ちょっとそれはありますね。器具が高いイメージがありますよね。

須知さん

夏ってやっぱり陸上とかって最悪シューズだけとかでできますけど、冬はどうしてもいろいろかかってしまうので。みんなちょっと忘れがちなんですけど。SDGsの1番目って「貧困をなくそう」なんですよ。なんで僕、お金がないから競技ができないとかテレビで見ているだけにはなって欲しくない。もっとみんなが安くできるスポーツを2030年やって欲しいなって思って、雪合戦推してます。

古坂さん

なるほどね。

須知さん

世界大会とか日本でやっているんですよ。

古坂さん

はいはいはい。

須知さん

あれルール整備して2030年でしたらみんな参加できるし、別にお金とか関係ないからすごいいんじゃないかなって思ったりします。

古坂さん

あーでもそれはちょっと面白い意見かもしれませんね。あと8年ありますから、そういう提案もできないはないと思います。面白いです。なるほどありがとうございます。松永さん教育者という立場からこのオリンピック・パラリンピックの開催が若い世代にどういうふうな影響を与えると考えていらっしゃいますか。

松永さん

さっきは経済効果の話が出てきたと思うんですけど、あるものを使っていくって素晴らしいと思うんですね。ただやっぱり僕はその中でぜひ出していただきたいのが、例えばCO2とかの観点から言ったときに、じゃあどれだけの削減効果があったのかとか、そういう気づきを与えて欲しいんだと思っていて。「お金が儲かったね、やったー！」というだけじゃなくて、これによって環境がどれだけ守られてるとか、そういうことを学ぶ機会を例えば小学生幼稚園いろんな人に発見させるすごいい機会だと思うん

ですよ。だから札幌の例を実際にやりながらそれを教材にしてみんなで考えてみようよというふうにやっているとすごくいいと思うのと。あと僕教育の中で一番最近大事だと思っているのが共創ってなんだろうっていうふうに思っています。

古坂さん

共創ってなんだろう、そんな話だけで1時間いけますね。共創って何？哲学ですね。

松永さん

僕ね。今回羽生選手の活躍を見たときに、スポーツって先ほどおっしゃったとおり感動だなと思ったんですね。要はメダルを取るという感動以外にも例えば4回転半にチャレンジするあの感動ってすごい感動しますよね。それを子供に教えたいと思うんですよ。例えば彼の今まで4年間の軌跡というのを岡崎さんみたいにやっぱりスポーツを知られている方しか語れないじゃないですか。大変さというのを。だからもっと出てきていただいて、例えば教育の場に出てきていただいて、あの4年間でこんな大変なんだよと。その結果あんなった、そのあとこうなったよということを、人の生きざまとか。昔は伝記みたいなのでやっていたと思うんですけど、生きた伝記みたいな形でやっていくと多分子供たちはすごい学ぶことが多いと思います。

古坂さん

そうですね。それが何かということの説明は難しいですけど、まあ感動でいいですよ。

松永さん

感動でいいと思います。

古坂さん

僕らは感動するために生まれてきて死ぬんでしょね。僕は勝手にそう思っているんですけど。

岡崎さん

やっぱり競技をやっているんで、勝ち負けは確かにあるんですけど、終わったあと健闘を讃えあうのもオリンピックなので。

古坂さん

韓国の選手と日本の小平奈緒さんの、あの2人のストーリーとかも今回もまたあったりとかしてね。すごく感動しますよね。

岡崎さん

そしてチーム力とかもありますから、そのチーム力をいかに皆さんで発揮しながら、讃えあったりとか。で、メダル取れなかったけれどもスノーボードですごいくると回っている女の子、失敗しちゃったんですけど。でもそれはやったことがないけどよくやったって言って外国の選手たちがみんなハグしにくる。

古坂さん

あれは最高ですね。

松永さん

今回フィギュアスケートの時にコーチが何を話したかってことがすごく問題になりましたよね。あれって多分中途半端にあそこだけ切り取っているからだと思うんですよ。あれ多分ストーリーがあつてあそこだけだったら実は感動の話かもしれないのに、結局そういう出し方をしちゃってるじゃないですか。だから多分これからメディアの放映のやり方も変わっていくべきだと思うんですね。いわゆるストーリー

ーは横で、例えばオンデマンドで見れてとか、あと選手たちの会話ももしかしたら全部聞こえているのかもしれないし。ちょっと選手としていやかもしれないですけど。そういうところもメディアの使い方っていうのも変わっていかないと、我々は感動もっとしたいので、そこはポイントになってくるんじゃないかなと思います。

**古坂さん**

前回の1972年札幌大会ではオリンピックの開催により、地下鉄とか道路のインフラが整備されました。だから僕ら青森からするとやっぱり札幌って地下鉄あるんだよなという意識があるんですよね。周りはほとんどないのに。秋元市長、今回は市民の生活や札幌市だけではなく、日本にどんな未来を残せていけるとお考えですか。

**秋元市長**

そうですね。1972年の時というのは札幌も人口が急増している時期でした。ちょうど1970年に100万人になって今200万人に近いです。この五十年間で100万人増えていると。そのぐらい急増していた時の開催。いわゆる開発型といわれるオリンピックのあり方だったと思うんですね。2030年の大会というのはIOC自体がクライメートポジティブな大会を義務づけています。そういう意味ではCO2の削減ではなくて、吸収量が上回らなければいけない。大会運営自体が。というようなことも含めて先程来皆さんのいろいろなお話があって、いろいろな社会なりが変わるそういう転換点としての大会ということになりますので、まさに地球規模の環境問題であったり、ダイバーシティ・共生の問題であったり、ITを含めたいろいろな形の仕組みが変わったり、さっきもありましたよね。今までの放送とか見え方を選手の方から見えたら面白いんじゃないかというようなことも含めて、いろいろ感動をいかに伝えるかというような形に変えていける、大会そのものの運営だったり社会が変わっていくきっかけにしていきたいな、というふうに思っているんですね。そのために2030年の大会が決まった、先程来お話があるようにこの8年間にどういうプロジェクトを立てて、目標値を2030年の目標にしたときに交通システムも、これから例えば全国的に日本の中でローカルで公共交通を維持していくというのは大変なんですね。バスの運転手さんを確保したり何なり。そうするとどういふうにその地方の橋というものを確保していくのかというような視点も含めてですね、1つの大会に向けていろいろな実験をやってそれが全国展開していくような、そういう大会にしていければなというふうに思っています。

**古坂さん**

なるほど。須知くんすごいうなずいてましたけれども。

**須知さん**

交通システムを開発している身としてはですね、今札幌すごい雪降って溶けて道路ボコボコでって悩んでいるところとかは、もしかしたら我々が開発しているロープウェーとかが役立ってるんじゃないかなみたいなことで。

**古坂さん**

自分のビジネスをぶっ込んでくるよね。須知くんロープウェー売ってるんだもんね。

**須知さん**

それだけじゃなくて自動運転とか、本当にやっぱりテクノロジーというのは日々進歩しているので、そういう所には何か投資していただけると全体としてより良い都市とかより良い移動っていうところにつながっていくのかなというふうに思いますね。どうしても大企業からの調達とかになりがちな一方で

今 J-Startup とかの取り組みだとやっぱり、そういう企業から優先して何パーセント調達しましょうっていうのをアメリカがやったりとか、東京もその全体の予算のうち何パーセントは必ずベンチャーから調達しましょうっていうようなことをやっていたりするので、ぜひオリンピックの中の取り組みでもそうやって若い人を育てていくっていうところをやっていたいただければ、業界とかも盛り上がるのかなって思っていますね。

松永さん

やっぱりインフラが整うとかってやっぱり一部の話じゃないですか。やっぱりもっと総合的に見ていかなきゃいけない時代になると思ってて、そういう意味では僕は 2030 年時点で札幌市がちゃんとスマートシティ計画、もうすべてをいわゆる全部データから持ちながら、しかもインフラだけじゃなくて教育福祉すべての領域、医療も含めたものやっていくってことをそこで示していく。それでその中でオリンピックという開催はここまでできていますよってことを数字で世界に広めるいいチャンスだと思うんですよ。

古坂さん

そうですね。でも 8 年後だからね、本当に若い人使わないと意味がないですからね。ありがとうございます。さあコチュさん、札幌市の魅力。こちらを世界に発信するためにこのオリンピック・パラリンピックを通じてどのようなものを残すべき、1 個と言えないと思うんですが、こういう部分を残して欲しいなという希望も含めてどうですかね。

コチュさん

本当におっしゃる通りいろんなことを残していきたいなと思うんですけども。海外から見ると日本のイメージが何でもかんでも遅れて実施する。遅れてその波に乗ってくるんですが。

古坂さん

日本って遅いんですか。

コチュさん

そうですね。遅くって結構世の中動いている中で日本はもう昔の形とか昔のやり方とか昔のスタイル残って、ノーアクティビティっていうイメージがあるんですけど、ただそういうイメージの中に、日本はやるまでは結構時間がかかるけど一回やったらベストプラクティスを出すっていうイメージがあるんです。で今はもうオリンピック周りでは結構サステナビリティの何て言うんですかね、サステナビリティ観点での批判とかが世の中結構今多いので、日本は 2030 年までにこのサステナブルオリンピックということのベストプラクティスをドンと出して欲しいなと思います。

古坂さん

最終面で。

コチュさん

そうです。

古坂さん

これですよって。

コチュさん

そうですね。ベストを出してもらいたいなと思ってます。

古坂さん



大きな企業とかもそうですね。新しいことに手を出さないけれどもある程度出し始めると急にバーツっていきじゃないですか。そういう印象があったんですね。なるほどああそれはちょっと意外と驚きました。言われてみたらそう。ありがとうございます。篠田さん、このオリンピック・パラリンピックも開催後の地元における経済効果というのはやはりその場はきっと盛り上がると思うんですが、その後どういうふうになっていくだろうなというふうに想定していますか。

篠田さん

いやもちろん期待はできますよね。したいですし、先ほども皆さんのお話をうかがっていて松永さんのカメラをと何か体験型の、例えばオリンピックの施設だったりとかいろいろ必ずしも作るものだけではないと思うんですけど、札幌に行けばこういう体験ができるとか、個人的にはやってみたいんですよね。冬季のスポーツってなかなか縁がないじゃないですか。

古坂さん

カーリングとか乗ってみたいですよね。

篠田さん

あとは例えばスケート靴もフィギュアとスピードスケートってどう違うのかなとか、多分立てないと思うんですけど。

古坂さん

雪国はだいたい履いてるんですよ。僕は小学校くらいから履いてるんですよ。

篠田さん

いつも穴があくほど見るっていうか、どんなふうに違うんだろうと。それを履いてみるだけでもいいかなっていう。そんなリンクを何周も絶対できないので、履いてみようとかそのぐらいのライトな体験ができるとか、こういうのが絶対観光資源になり得ると思いますし。

古坂さん

しかもあの名場面のあそこで滑れるんだったら、「入場料 500 円、安っ」みたいなね。

篠田さん

そうなんですよ。やってみたいですし、あるいはなかなか必ずしも日本人選手がたくさん出ているわけではない競技っていうのはあると思うんですよね。ボブスレーとかリュージュとかスケルトンとか、ああいうのもシンプルに興味があって、乗ってみたいなとかね。

古坂さん

スケルトンは、僕は死ぬと思うんだけど。素人が乗ると。

篠田さん

それを例えば VR で経験にするとか、いろいろ方法あると思うので。VR とかで。でもやっぱりそういうのも含めて経済効果として期待したいと思ってるんですよ。従来のオリンピックでやっぱりよくあるのはテレビを買い替えるとかそんなことは経済効果として言われてましたけど、やはり松永さんのお話をうかがっていてもう絶対それって違うじゃないですか。もう時代が完全に、やはり東京大会も皆さんそうだったと思うんですけど、必ずしもテレビで観戦するだけではないインターネットとかデバイスも多様化している中で従来の経済効果として見込まれてたいわゆる家計消費的などところだけではない部分で、経済効果が期待できると思っているんで、個人的にはぜひなんかそういうスケート靴体験とかやってみたいなと思ってます。

古坂さん

景気の気は気分気でやっぱり気分を上げていかないと経済も上がっていかないですね。

## <スポーツの多様性と持続可能な未来社会>

古坂さん

ここからは2つ目のポイントでございます。スポーツの多様性と持続可能な未来社会というわけでちょっと近そうな話なんですけど、ちょっと格が違います。今年の北京オリンピックではスキージャンプもしくはスノーボードで、オリンピックで初めて男女混合の種目というのが行われました。岡崎さんはスポーツ選手として2030年オリンピック・パラリンピックも含めてどのようなスポーツの多様性があると思いますか？

岡崎さん

そうですね。今回本当に北京オリンピックでいろいろと混合リレーとかもいろいろショートトラックも出していましたし、男女の何かこう力の差はあるとは思いますが、でもそれを一緒にしてチーム力でいい成績というか上げていくっていう感じにはなるんですけど、やはり夏季と冬季だと種目の種類がやっぱり冬季は少ないものですから。

古坂さん

全然違いますか。

岡崎さん

全然違うんですよ。

古坂さん

何種類ぐらいなんですか。

岡崎さん

どれぐらいなんだろう、それはわからない。

古坂さん

パラリンピックは6種類とか言ってましたよね。相当少ないんですよ。

岡崎さん

少ないですね。なのでやはりそういうので今後、何かダブルスじゃないですけど、そういう多様性でいろいろな競技というか、競技数を多くしてもらいたいというのは確かにあるので、だから今回本当にそういうのどうなのかなと思って見てたら、すごく楽しかったですし。

古坂さん

男女が一緒になるとどうなるのかなと思ってみるとそれぞれで日本という国が見えてきたりとか、何かそういうときに国対抗なんだなってふと思ったりしましたね。男女混合見ると。須知さん、若者世代からはどうですか。

須知さん

そうですね多様性というところですよ。冬のオリンピックってどうしても北の国の祭典というか。

古坂さん

そうなんですよね。北半球しかいないんですよね、確かに。

須知さん

でも今北海道でいうとニセコとかにすごい南半球の人がトレーニングしてたりとかっていう動きがあると思うので、そういう意味で言うと全世界的にいろんな国の人がいろんなメダルを取ってというようなパラリンピック・オリンピックになっていけばいいと思う。あとは男女混合とかじゃなくて僕個人的にはオリパラ混合とかもあつたらすごい面白いのかなと。そういうのもぜひ見てみたいなと思ってます。

古坂さん

全部の競技は無理だけれどもできるものはあると思うんですよね。幅跳びに関してはパラリンピックの方が上ですからね、男子は。いろいろ問題がありましたけれど。器具の問題。でも僕はそれでいいじゃん、キミも使えよというぐらいの感じなんですけど。何かわかります。そこは僕も夢ですね。オリパラ同時に見たいですね。はい、ありがとうございます。さあ札幌市がこの冬季オリンピック・パラリンピックの開催を目指しているこの2030年でございますが、SDGsの目標達成の年。オープニングでも言いましたが、2030年でございます。さあ松永さん、教育者の立場からこのアフターSDGsオリンピック・パラリンピックはこうあるべきだ。確かにアフターSDGsになるんですね。オリパラはこうあって欲しいというのも含めて教えてください。

松永さん

多分これはいろいろな方の認識があると思うんですけれども、そもそもSDGsって特別な方というか意識の高い方の世界だったんですね。今までって。それが今はもう本当に落ちてきてみんな考えなきゃいけない、今多分環境の問題って若い子たちに言ったらみんな考えているわけですよ。

古坂さん

僕の3歳の娘が歌ってます、SDGsの歌。

松永さん

ですよね。そうなったときにやっぱりアフターSDGsというのは当たり前のことになって欲しいんですね。実はさっきの投資の話でも出てきたんですけども、今投資の世界でもESGとって実は投資の中で環境を考えたりするのは当たり前なことなんだと。昔はやらなきゃいけないってなったんですけど、当たり前のことになってきている。そういう意味ではSDGsは、アフターSDGsはもう全然違う目標にして欲しい。例えば貧困とかそういうことが目標にならない世界というのが多分一番の目標であってSDGsの目標はすべて達成されて次の目標を考えなきゃいけないっていうのが多分理想的な姿。これは理想って言われるけど多分それを目指さないと何もできないんですね。多分一個一個、気候なんとかとかバラバラでやる話じゃないので、結局SDGsの1番の根本というのは地球の課題じゃないですか。地球で考えるっていうことって実は平和にも結びついてくるし、いろいろなものに結びついてくると思うので、そういう意味ではアフターSDGsはそういう感覚が普通になって欲しいなというように思います。

古坂さん

アフターSDGsはSDGsという概念がなくなる。それがアフターであると。面白いですね。コチュさんどうですか。

コチュさん

そうですね、それで言うとwith SDGsみたいな形でずっと続けられる、進化していくものにはなると思いますね。そういった意味で本当に日付的にも非常に重要な2030年っていうところにもなりますし、

どんどんこう何て言うんですかね、日本のイメージっていうのもやっぱり海外から見て何て言うんですかね、立て直すっていういい機会に。

古坂さん

正直に教えてください、どんな感じですか今日本。遅いし意見言わないし、みたいな感じですか。

コチュさん

ペットボトル多いしプラスチック消費多いし。

古坂さん

やっぱりダメですか、やっぱり日本多いなって感じですか。

コチュさん

大ダメですよ。

古坂さん

やっぱそうですか。

コチュさん

例えばですよ、お菓子とか買いに行くじゃないですか、お菓子の袋がプラスチックにもかかわらず、中のお菓子が一つ一つパッケージされるっていう。

古坂さん

清潔にって意味ですよ、あれは。

コチュさん

何か外国人から見るとプラスチックバッグ with チョコレートを買っているようなイメージなんですよ。

古坂さん

ああなるほど。かといって直でクッキーとかポケットに入れられないですよ、どうしても僕らはアレが根付いちちゃって。何か開けて、開けてって。

コチュさん

多分一気に食べられないから、その辺がちょっとサステナビリティの多分思考が少し入っているとは思いますが。悪くならないように一個一個をパッケージ化するっていうのは、多分そういったもったいないっていう文化から多分来ているところもあると思うんですけど。ただそれってプラスチックじゃなくてまた環境にやさしいものにした方がいいとか、あとやっぱりスーパーとかに行くと野菜とか果物とかもプラスチックにパッケージされるときとかもあるっていうところもあり、結構日本はプラスチック、環境にあんまり優しくないことをやっているよねっていうイメージが海外からは強いんですよ。

古坂さん

なるほど、そういうところもこのオリンピック・パラリンピックで払拭できればいいかなという。

コチュさん

遅かったけどさすが日本やりましたっていう事例出せたらいいなと思います。

古坂さん

何か包んでいるなと思って触ってみたら、ああシャボン玉とかね。それぐらいでもいいかもしれませんね。ちょっと苦いけど。なるほど、ありがとうございます。さあ秋元市長どうでしょう。今まで色々とお話を聞いてきましたが、開催地の立場から見るといかがでしょうか。

## 秋元市長

まさにオリンピック・パラリンピックっていうのは世界から注目をされる大会。そして世界中からいろいろな人たちが来る。今までですと、冬の大会というとやっぱりもう北の人たちのものということです。先ほどの話にもありましたけど、暖かい国の人たちもウィンタースポーツをやり始めています。今回の北京大会でもずいぶん参加国は増えましたね。天然雪で競技ができる。北京の大会もほとんど人工雪でありました。札幌はちょっと今年は降りすぎですけど。やっぱり天然雪でスキーが楽しめる。あるいは先ほども雪合戦の話がありましたけど、必ずしもスキーなりスケートボードだけではなくて、ウィンタースポーツあるいはウィンターリゾートという意味で発信をする最高の機会だと思っている。それだけに環境の問題とかあるいはいろいろなDXの問題とかですね、やはり先ほどご指摘がありましたけれど日本が前に行っているんだっていうふうにするためには相当頑張らなきゃいけないと思うんですよ。まさに2030年大会を契機に先進性をいかに示すということが非常に重要になってくるというふうに思っていますので、それを市民の皆さんとか道民の皆さん国民の皆さんと共有していろいろなプロジェクトを立ち上げていけたらなと、こんなふうに思っています。それが次の時代に残していけるもの、まさにSDGsということを考えずにそれが当たり前前の社会をつくっていけるような目標を立ててやっていけたらいいなと、こんなふうに思っていますね。

## 古坂さん

確かに岡崎さん、この2030年札幌オリンピック・パラリンピックが開催された場合、スポーツ選手から見て同じような感じの質問が多いんですけど最も期待したい、レガシーという言葉僕は普段使わないんですが、最も期待したい、つなげていきたい意志みたいなところっていうのは何になりますかね。

## 岡崎さん

今本当にもう皆さん言ってる通りに、いろんなものが本当に日本が一番だっていうふうに出したいんですけど、それなりに大変なことはたくさんありますし、やはりスポーツ選手だから言えるっていうことは、本当にみんな選手たちは頑張ってるっていうことで、なので何でしょう。いろいろ経済効果もあるとは思いますが、そのお金の問題とかそれは専門の方に任せて。

## 古坂さん

そうですね。

## 岡崎さん

選手はもう本当に自分のやるべきことを。

## 古坂さん

あまりお金のことを考えていないですか。

## 岡崎さん

あんまり…まあどうかな。

## 古坂さん

その大会に勝つためだけに練習するんですもんね。

## 岡崎さん

なおかつ自分のためにやれば周りの人たちも豊かにしてあげられるっていう、そういうのもちょっとあると思うので、なおかつ子供たちにやはり子供たちの夢の後押しっていうことで、やはりその時の選手たちの頑張りっていうものをしっかり見せていきたいですから、やはり札幌でウィンタースポーツは結



構盛んですから、道産子いっぱいいるんで、その道産子魂をもうぶち撒けていってもらって、なおかつ世界の人たち選手たちも熱い魂をやはりそこでみんなで競技し合って、で終わったらもう「はいよくやった」っていう感じで讚えあうっていう。そういうのをやってそれをずっと続けていきたいということですよ。

篠田さん

本当に皆さんのお話をうかがっていていろいろ私も今日何て言うんでしょう。いろいろ考えて、やはり一つさっきコチュさんがおっしゃってたお菓子の話とかほんと興味深いなと思って、もしかしたら例えば札幌大会のグッズとか公式グッズとかで何か新しい素材、素材なんですかね、必ずしもそういうのだけじゃないかもしれないですけど、そのパッケージの技術とか8年ありますし、何か出てきて例えばもっと10年20年経った後に、これって札幌オリンピックがきっかけでできたんだよね、みたいなものができてくることが経済効果にもなりますし、まさにレガシーだと思ってまして。実際東京大会の時もピクトグラムとかいろいろありましたよね。あの東京大会の、東京オリンピック、昔の東京オリンピックがきっかけでこういうものができたっていうのはよく話題になるじゃないですか。だからそれを今回の2030年というまさにそのSDGsの観点もありますし、今やはり課題として日本が直面すべきことって今日コチュさんからお話をお聞きするだけでもこんなにあったっていうのは本当に自分でも発見で、じゃあそれはどうしていくかっていうのはある意味日本人の一番得意としているところだと思うんですよ。それでどんどん目標に向かってまさにやっていくっていう。だからこう何かグッズとかもちょっと期待したいなと思っちゃいました。ぜひ市長にもお話をうかがいたいですね。

古坂さん

そうですね。肌感覚として日本人って言われるとすげー「何だよ」というくせに次の日ちゃんとそれを考えるよね。日本人ってね。その場で「あ確かにね」と言わない。「伝統があるんだよ。こっちは」って言って、次の日「やってみようかな」とっていう感じになることがありますよね。

篠田さん

一旦凹むんですけど、「でもそうだな」みたいな。

古坂さん

これはちょっと遅すぎるって思いますけどね。でもまあ得意なこともあるんですが、逆に練って作って持っていくということ。そういうわけで、もうそうですね、もうこの時間になってしまいました。2030年冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致の意義についてたくさん話を聞いてきましたが、最後に皆様から一言ずつもう時間なので感想をうかがっていきたく思います。ではまず岡崎さんから。

岡崎さん

ぜひ札幌オリンピック行いたいと思いますので、ぜひ皆さんの力をよろしくお願いします。選手の熱い気持ちに乗っかってくると思うので、楽しみにしていただきたいので、ぜひよろしくお願いします。

コチュさん

先ほども申し上げたんですけども、世界にすごく非常にいい例、オリンピック・パラリンピックを出していただきたいなと思っています。

古坂さん

いったん持ち帰ります。篠田さん。お願いします。

篠田さん

今日お話をうかがっていて自分でも話して何か楽しみになってきて、ものすごくワクワクしてきたので、このワクワク感をぜひ皆さんもちょっとご自分のいろいろ置かれている状況に照らし合わせて自分だったらもっとこういうのが考えてもいいんじゃないかなとか、自分ごととして置き換えて考えていただきたいなと思ったので、ぜひみんなでワクワクしたいなと思いました。

古坂さん

ありがとうございます。松永さん。

松永さん

そうですね、何かやっぱり今日初めて実は岡崎さんにお会いしたときにやっぱり長野の感動がぐっとくるんですよ。

古坂さん

そうなんですよ。

松永さん

すごい来ますよね。

古坂さん

興奮するんですよ。

松永さん

興奮しました。なんかいろんなことを思い出したんですね。

古坂さん

「岡崎だ！」ってね。

松永さん

その感動をやっぱり自分の次の世代にやっぱり感じて欲しい。なのでやはりぜひ札幌でやって欲しいし、その時にはやっぱり昔テクノロジー大国日本と言われましたが、トランスフォーメーション大国日本ということで、新しい日本の意義っていうのを世界に発信する機会になればいいなと思うので、ぜひ成功させて欲しいです。

古坂さん

はいありがとうございます。須知さん。

須知さん

選手も2030っていうところに頑張りますし、我々も2030という目標があればそこについて頑張っていて、選手のストーリーもあるし我々自身のストーリーっていうのも出来ていくと思うんですね。そういう意味ではぜひ秋元市長に頑張っていていただきたいなと思います。楽しみにしています。

古坂さん

その時は札幌のロープウェーがいいんだよね。

須知さん

それは間違いないですね。

古坂さん

予算を出しておいて。最後に市長お願いします。

秋元市長

今日もたくさんのご意見いただいて大変参考になったというか、ものすごい力付けられたなというふう

に思っています。皆さんおっしゃっていたようにやっぱりいろいろな課題、社会課題をいかに変えていくのか解決をしていくのかっていうひとつのきっかけにこの2030年の大会が使っていければいいなというふうに思っています。オリンピック・パラリンピックというものを開催すること自体も大変なことではありますけれども、せっかくやることであるわけですから、そこにいろいろな課題を解決していく。そして次の世代の子供たちにこの素晴らしい地域なり国なりを残していく、そして世界を残していくというような大会につながっていくようなそういうものにしていければなというふうに思っています。そのためにもある意味市民の皆さんはもとよりですけど日本全体の皆さんの後押しを一緒にやろうよと。自分ごととして考えていただくということが大切かなというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

**古坂さん**

はい今日はどうもありがとうございます。というわけでもうあつという間にお時間で。オンエア上は1時間なんですけど、現場では7時間回してしまして、結構今もうケンカとかいろいろあったので、全部切ってますけども。この時間でございます。またこういうお話パート2でもできるように頑張りますので、よろしくお願い致します。今日はどうもありがとうございました。またお会いしましょう。さようなら。